

第7回吉野作造研究賞の選考結果

〈講評〉

吉野作造記念館では、吉野作造が終生後進の育成に取り組んでいたことに鑑み、吉野作造研究賞を設け、若手研究者の育成と吉野の精神の継承、吉野研究の裾野の拡大に取り組んでいる。

第7回吉野作造研究賞は、2020年4月発行の『吉野作造研究』第16号に募集要項を掲載したほか、全国の研究機関、教育文化施設に案内を送付、またホームページ上での募集告知を行った。応募資格は2020年4月1日時点で40歳以下の者とし、応募作品については政治史、政治思想史、文化史などを主題とした未発表のものか、または2018年4月1日から2020年3月31日までに刊行された著作、研究論文を対象とした。

今回の応募は7作であり、その多くが質の高い研究成果であった。審査会による慎重な選考の結果、以下の2作を甲乙付けがたいものとして同時に最優秀賞、くわえて2作を優秀賞とすることを決定した（表記はいずれも応募順）。

〔最優秀賞〕

- ・ 熊谷英人『フィヒテ 「二十二世紀」の共和国』岩波書店、2019年2月
- ・ 古田拓也『ロバート・フィルマーの政治思想—ロックが否定した王権神授説』岩波書店、2018年8月

〔優秀賞〕

- ・ 渡部亮「『大正デモクラシー』の政党化構想のゆくえ—社会民衆党の「議会主義」に注目して」『史学雑誌』128巻8号、2019年8月
- ・ 松本洵「初期議会自由党の〈党議〉—議会制度下における一体性の模索」『国家学会雑誌』132巻9・10号、2019年10月

最優秀賞1人目の熊谷英人氏は1984年生まれ。現在、明治学院大学法学部准教授（所属・職名は応募時のもの—以下同）である。受賞作『フィヒテ 「二十二世紀」の共和国』は、フィヒテの思想形成・展開の過程を時系列に沿って内在的に理解し、その全体像を明快に描出した点で、非常に堅実かつ完成度の高い研究である。独自の共和国論の分析や、抽象的な内容をわかりやすく論じる文章力も評価された。

最優秀賞2人目の古田拓也氏は1985年生まれ。現在、広島大学法学部助教である。受賞作『ロバート・フィルマーの政治思想』は、同時代の論争状況を背景にフィルマーの思想を読み解き、社会契約説批判者としてのフィルマーの再評価という国際的な研究動向に適っている。日本で行われるフィルマー研究としては、従来の先行研究を大幅に進展させるものであり、日本におけるフィルマー受容を論じている点も評価できる。

次いで優秀賞1人目の渡部亮氏は1995年生まれ。現在、東京大学大学院人文社会系研究

科修士課程に在学中である。受賞作「「大正デモクラシー」の政党化構想のゆくえ」は、吉野作造らのいわゆる大正デモクラシー的政治動向が、社会民衆党内の赤松克麿、亀井貫一郎、安部磯雄ら三者三様の「議会主義」の展開に与えた様相を内在的に問うことで通説的理解に修正を迫る意欲作であり、政党史研究としての発展可能性が感じられた点が評価された。

優秀賞 2 人目の松本洵氏は 1993 年生まれ。現在、東京大学大学院法学政治学研究科博士課程に在学中、日本学術振興会特別研究員（DC1）である。受賞作「初期議会自由党の〈党議〉」は、政党が政治団体として一定の結集力を持ち、藩閥への対抗／交渉勢力として台頭し得たのは何故かという根本的な問いを立て、初期議会期の自由党の党議を通じた一体性獲得過程を論じる。政党史、議会史研究としての発展可能性が感じられ、評価された。

コロナ禍にあって若手の優れた研究が多数応募されたことは非常に喜ばしく、各受賞者およびすべての応募者の今後ますますの研究の進展を期待する。

審査委員会 委員長 宇野 重規（東京大学社会科学研究所教授）
同 委員 松田宏一郎（立教大学法学部教授）
同 委員 村井 良太（駒澤大学法学部教授）